青年医師の遺産 ①

受け継がれる医療協力

「寄せられたお金は、看護婦や検査技師などを志すネパール人のための奨学金にします。彼の遺志がいつまでも輝くように」

医療ボランティアとして世界的な活動を展開しているNGO（非政府組織）の「アジア医師連絡協議会（AMDA）」＝本部・岡山市＝の菅波茂代表が、一人の青年医師の笑顔を思い出しながらこう話した。

リンパ腫（しゅ）のため昨秋、亡くなった大阪市東成区の小児科医、篠原明さん（当時29）。遺族がAMDAに寄贈した香典三百万円と篠原さんをしのぶ有志から寄せられた善意約百五十万円で、「篠原基金」が設立され、十一日から正式に運用が始まった。

「『援助』などではなく、形だけの豊かさの中で失ったものを学ぶために、日本人は進んで発展途上国に出て行くべきである」

生前、こう話していた篠原さんは、医師としての時間のほとんどをAMDAの医療ボランティア活動に費やし、ネパールでの医療ボランティア活動に奔走した。

自らの体をむしばむ病気と闘いながら、現地の医師と協力して、ネパールでの小児病院建設に力をつくし、実現にこぎつけた矢先の急逝だった。

来月の病院竣工を見られず、婚約者との挙式も果たせないまま短い生涯だった。

共感を呼ぶ「寄せられた稲穂が万倍するむきさが、多くの関係者のかのよう」とAMDAの仲間たちが表現するように、「その思いを受け継ぎたい」と、国際医療協力の世界に身を投じる看護婦や、医師を志す若者たちが続出。基金の運用でネパールでも多くの医療従事者をはぐくみ、未来に花を咲かせようとしている。

◇

冗談好きで、自分自身の活動もことさらに話すことはなかった篠原さん。その夢の軌跡を振り返る。

基金の問い合わせはAMDA（☎086・284・7730）。協力は郵便振替〇一二五〇―一一〇七〇九（AMDA篠原基金）

（社会部　吉村剛史）

ネパール・ダマック市で医療協力活動に従事していたころの篠原さん。発展途上国に目を向ける医師が少ないことを嘆いていた